

## 戦後社会運動における知識人の「語りかけ」の受容

— 国民文化全国集会における「国民文化」言説を事例として —

一橋大学社会学研究科 長島祐基

### 1 : 目的

本報告では戦後の社会運動において、知識人たちが自らの思想や運動の目標を人々に「語りかけ」ることに対して、人々がとった反応、特にその能動的側面と受動的側面の二面性とその関係を、1958～1960年に開催された国民文化全国集会に参加した人々を対象として描き出す。これによって、都築(1995)、小熊(2002)らの思想史研究では十分に明らかにならなかった知識人の言説の受容側の構造を明らかにする。

### 2 : 方法

集会議事録と、集会参加者のアンケート(約400票)を中心に分析する。その際、上原専録を中心とする知識人から、この運動の目標として提示された「国民文化」の概念に着目し、その概念が討論と参加者のアンケートの中でどのように扱われ、受容されているのかに着目する。その上で、「国民文化」やそれをめぐる討論を通じて見られる／生じてきた参加者の主体の問題を考察する。

### 3 : 結果

国民文化全国集会は記念講演と分科会の討論から構成される集会であった。集会冒頭の記念講演で知識人側から提示されたのが、運動の目標としての「国民文化」の創造である。それは階級や民族の上位の概念として「国民」を置き、それにむかって統一的な文化を創り上げていくという理念であった。しかしそれは一方向的に参加者に「語りかけ」られたものではなかった。集会後半の分科会では討論形式がとられ、知識人と参加者が「肩を並べて」討論をしていた。確かに、分科会のテーマには「国民文化」という言葉が並んでおり、その点ではこの言葉は集会全体に一定の力を有している。しかし、討論形式をとったことは、知識人の「国民文化」に対して積極的な問い直しを行う機会を参加者に与えることになった。それは以下の三点に見出せる。(1)分科会の討論において、参加者から文化と政治の問題、文化的水準のとらえ方に関する問題、知識人の実践の問題といった問題提起が提示される点。(2)集会最後の全体会議で「国民文化」における部落解放等の視点の欠如が指摘される点。(3)労働者から「労働者文化」が対抗的に提示される点。しかし、この分科会に参加した人たちのアンケートでは、「国民文化」の問題提起と自分たちの実践経験とのかい離、齟齬を指摘する意見がみられる。討論における知識人の言説と、参加者の実践経験との間のまとまりの悪さは(1)知識人に対してより明確かつ実践に役立つ問題提起を求める方向と、(2)他の参加者との経験の交流を通じて問題をより深く考えていこうとする方向に分かれていった。

### 4 : 結論

集会討論では、「国民文化」に対する問い直しという点に参加者の積極的な主体の側面が存在している。他方、問題点や目標をもっと具体的に明記することを求めているという点では、受動的な側面が見られる。したがって参加者は「国民文化」の需要に際して、問題の追求や提起という積極性と、問題点を明確化して提示してもらうことを求める受動性という矛盾を抱えている。他方、参加者が持つもう一つの積極面として、自らが「語る」ことによって問題を積極的に捉えなおす「学習」へつながる面が存在していたことがあげられる。特に「学習」は、知識人の言説の「語りかけ」とはパラレルな関係のもとに成立している。

小熊英二, 2002, 『民主と愛国』, 新曜社

都築勉, 1995, 『戦後日本の知識人 丸山眞男とその時代』, 世織書房

Bourdieu, Pierre, et al, 1965, *Chaiers du centre de sociologie Européere, sociologie de l'éducation 2*, Paris: Haye, Mouton. (=1999, 安田尚訳, 『教師と学生のコミュニケーション』, 藤原書店)